

# 罪悪感と潜在的な道徳的自己の関連

— 潜在連合テストを用いた検討 —

○古川善也<sup>1</sup>・中島健一郎<sup>1</sup>・塚脇涼太<sup>2</sup>・森永康子<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>広島大学教育学研究科・<sup>2</sup>比治山大学)

## 問題

従来、罪悪感は対人関係の危機シグナルであり、向社会的行動を促すことで他者との関係を修復・維持していく機能を持つ感情であると説明されてきた(e.g., Baumeister et al., 1994)。しかし、この説明には適合しない知見も多く存在する。例えば、関係修復に影響しないような行動(e.g., 身体洗浄)でも罪悪感や向社会的行動は低下する(e.g., Xu et al., 2014)。このような知見は、罪悪感の生起と行動との関連が対人関係の危機に応じて生じているものではない可能性を示唆している。

本研究では、この矛盾を解決するために「罪悪感が道徳的自己の低下へのシグナルとして機能する」という仮説を提案し、その実証を試みる。先行研究(e.g., Sachdeva et al., 2009)では、罪悪感を生じさせる不道徳行動が道徳的自己を低下させる一方で、その回復のために向社会的行動が動機づけられることが示されている。このパターンは、罪悪感の生起・行動喚起に類似しており、この点から上記の仮説は導出される。しかし、罪悪感と道徳的自己との対応関係について実証している研究はこれまで見受けられず、その検証が必要であろう。以上より、本研究では罪悪感を操作し、潜在連合テスト(IAT)を用いて道徳的自己を測定を行い、罪悪感と道徳的自己の関連を検証する。

## 方法

**実験デザイン** 1要因2水準(罪悪感操作:罪悪感想起, 統制)の参加者間計画

**参加者** 大学生56名(男性27名, 女性29名)

**手続き** 始めに罪悪感の操作として、参加者に自分の過去の経験を思い出し、その内容を記述する課題を行わせた。罪悪感喚起条件では罪悪感を感じた出来事について、統制条件では普段の休日の過ごし方について思い出してもらった。記述課題の後で、参加者に今現在感じている感情(罪悪感)は薊(2009)より3項目抜粋)について回答するよう求めた。続いて、道徳的自己の測定を行うために潜在連合テスト(IAT; Greenwald et al., 1998)を行った。道徳 IAT は構成を「自己-他者」「道徳-不道徳」とした。なお道徳 IAT のブロックの実施順

序はカウンターバランスをとった。

## 結果

**操作チェック** 条件操作の確認のために、罪悪感得点の条件差を確認したところ、罪悪感喚起条件で統制条件よりも高い得点が認められた( $t(36.97) = 4.84, p < .001, d = 1.30$ )。

**道徳 IAT** 自己と道徳の結びつきを示すように D 値を算出した。D 値の算出方法は Greenwald et al. (2003)に基づき、+2SD 代入法を採用した。道徳 IAT の D 値について  $t$  検定を行った結果、D 値の条件差は有意傾向であった( $t(53) = 1.96, p = .055, d = 0.52$ ; Figure 1)。しかしながら、統制条件( $M = 0.64, SD = 0.37$ )よりも罪悪感喚起条件( $M = 0.85, SD = 0.42$ )の方が道徳 IAT の D 値は高かった。

## 考察

本研究の仮説は支持されなかった。この結果については、いくつかの可能性が考えられる。1つ目は道徳的自己の個人差の存在が挙げられる。道徳的自己には個人差があり(Perugini & Leone, 2009), それを共変量として考慮することで想定している条件差を検出できる可能性を高められると考えられる。2つ目は、道徳 IAT の得点が自己と道徳との結びつきよりも自己の脅威への防衛として道徳を強く求める反応を反映していた可能性が挙げられる。3つ目は、IAT の得点はそもそも操作による変動が生じない可能性である。しかしながら、上林他(2016)は被服行動の操作によって道徳 IAT の得点に条件差が生じることを確認しており、適切な操作を行うことで道徳 IAT の得点の条件差を検出できると考えられる。

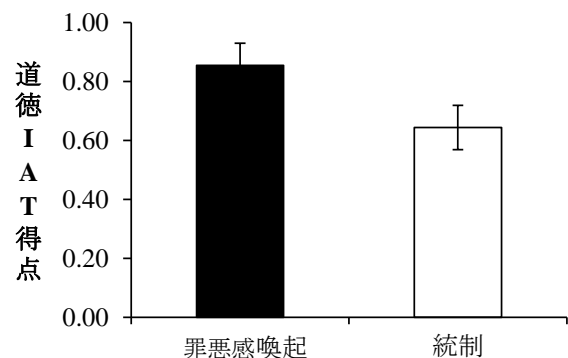


Figure 1. 条件別の道徳IAT得点